

徳島大学病院泌尿器科副科長



高橋 正幸

手術で摘除か薬物療法

現在、薬物療法の主流となっているのは分子標的薬という種類の薬です。がん細胞は自ら増

腎細胞がんは手術で完全に切除できた場合でも転移が出現する可能性があります。しかし、今のところ再発を予防できる薬剤はありません。再発、転移を早く発見するために、CTなどの定期的な検査を行います。

答 え

腎細胞がん

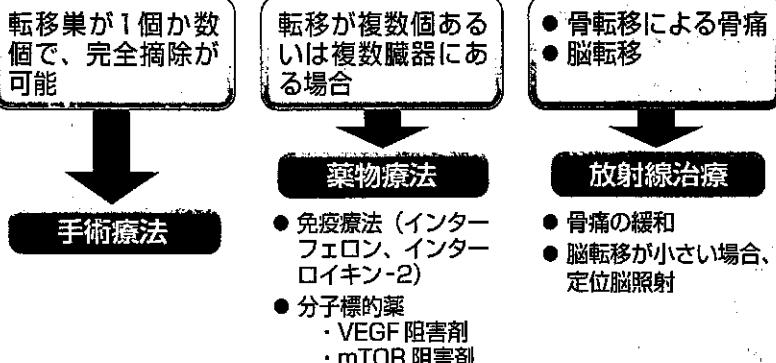


物療法、放射線治療がありま

しました。幸い転移はなく経過観察中ですが、腎臓がんは抗がん剤治療が効きにくくと聞きました。もし転移した場合、どのような治療になるのか心配です。転移した場合の治療法について教えてください。

腎臓がんが転移したら

■ 腎がん転移巣の治療



て広がります。肺が最も転移しやすい臓器で、その他に骨、肝臓、脳、腎臓、リンパ節にも転移するといふあります。転移に対する治療は主に、手術、薬物療法です。がん細胞は自ら増

て広がります。肺が最も転移しやすい臓器で、その他に骨、肝臓、脳、腎臓、リンパ節にも転移するといふあります。転移に対する治療は主に、手術、薬物療法です。がん細胞は自ら増

す。転移の数が1個あるいは数個まで、転移巣が摘除可能であれば、転移巣摘除術により生命予後が延長することが報告されています。そのため、完全に摘除能であれば、転移であっても積極的に手術で摘除する意義はあります。根治も期待できます。

手術ができない場合は薬物療法が適応となります。腎細胞がんは抗がん剤に抵抗性を示します。そのため、従来、インターフェロンやインターロイキン-2などの免疫療法が主体となっていました。この免疫療法は、腫瘍を小さくする効果はそれほど高くありませんが、肺転移のみの場合には腫瘍が消えてしまっています。主な副作用は発熱、倦怠感、長期に使用した場合にはうつ症状が出る場合があります。

腎細胞がんに対する分子標的薬は、日本では2008年に導入されました。大きく分けて血

管内皮増殖因子(VEGF)と

分子を抑える薬剤です。

VEGF阻害剤は腫瘍を小さくする効果が高いため、腎細胞

がんの転移に対し最も多く投

与されています。主な副作用は

命予後は明らかに改善していま

す。

VEGF阻害剤は